論文

第八章

日本国内のマスジド（モスク）の一覧表

１９３５年（昭和１０年）に神戸在住のインド系ムスリムらによって日本で初めて建設されたのを皮切りに、を逃れた移民と地元の支援によって１９３６年に名古屋に名古屋モスク（現在のとは無関係）が、１９３８年には東京回教礼拝堂（東京モスク）が開堂したが、名古屋モスクは戦災で焼失し、再建されなかった。

戦後はインドネシア政府が目黒区に設置したインドネシア学校のため土地を寄付、合わせてマスジド（モスク）を建設した。１９８０年代前半には国内のマスジド（モスク）は４ヶ所（東京３ヶ所、神戸１ヶ所）となったが、バブル経済に伴って世界各地から日本国内に仕事を求めてやってきたムスリムが永住していく過程で、各地に多くのマスジドが建設されるようになった。

これらのマスジドの多くはコンビニエンスストア、工場、ビルなどを改装して設置されている。

日本国内のマスジド（モスク）の一覧表については文化部宗務課による発行の『宗務時報』Ｎｏ．１１９に掲載された２０１４年１１月時点のリストを主に参照した。

	名称	所在地	運営者	設立年
1	神戸ムスリムモスク	兵庫県神戸市中央区中山手通二丁目25-14		1935年
2	東京・トルコ・ディヤーナト・ジャーミイ	東京都渋谷区		1938年（2000年再建）
3	バライ・インドネシア礼拝所	東京都目黒区	インドネシア大使館	1962年

4	アラブイスラム学院	東京都港区元麻布3−4−18	サウデイアラビア・イマーム・ムハンマド・イブン・サウード・イスラーム大学	1982年
5	日本イスラーム文化交流会館	東京品川区東五反田3−17−23	日本ムスリム協会	1954年
6	一ノ割モスク	埼玉県春日部市		1991年
7	伊勢崎モスク	群馬県伊勢崎市		1995年
8	成増モスク	東京都葛飾区		1995年（2001年再建）
9	日向モスク	千葉県山武市		1995年
10	境町モスク	群馬県伊勢崎市	ダル・ウッサラーム	1997年
11	海老名モスク	神奈川県海老名市		1998年
12	行徳モスク	千葉県市川市行徳駅前3−3−19	日本モスクファウンデーション	1998年
13	名古屋モスク	愛知県名古屋市中村区本陣通2丁目26−7		1998年
14	戸田モスク	埼玉県戸田市		1999年
15	大塚モスク	東京都豊島区南大塚3丁目42−7	日本イスラーム文化センター	1999年
16	富山モスク	富山県射水市津幡江110−2		1999年
17	八潮モスク	埼玉県八潮市浮塚649	ジャミアマスジドヤシオ	2000年
18	浅草モスク	東京都台東区	日本モスクファウンデーション	2000年
19	足利モスク	栃木県足利市		2000年
20	つくばモスク	茨城県つくば市要315−10	つくばイスラム協会	2001年
21	新安城モスク	愛知県安城市		2001年
22	白井モスク	千葉県白井市		2001年
23	富士モスク	静岡県富士市		2001年
24	大阪中央モスク	大阪府大阪市西淀川区大和田4−12−16	大阪マスジット	2001年

25	八王子モスク	東京都八王子市平岡町36−6		2002年
26	各務原モスク	岐阜県各務原市	岐阜ファティフモスク	2002年
27	新潟モスク	新潟県新潟市北区	イスラミックセンター新潟	2002年
28	館林モスク	群馬県館林市		2003年
29	新居浜モスク	愛媛県新居浜市一宮町二丁目2−43		2003年
30	蒲生モスク	埼玉県越谷市		2003年
31	小山モスク	栃木県小山市大字神鳥谷237−1		2005年
32	いわきモスク	福島県いわき市		2005年
33	京都モスク	京都府京都市上京区宮垣町92	京都ムスリム協会	2005年
34	横浜モスク	神奈川県横浜市都筑区早淵1−31−13		2006年
35	所沢モスク	埼玉県所沢市		2006年
36	豊田モスク	愛知県豊田市堤町青木28−1		2006年
37	名古屋港モスク	愛知県名古屋市港区		2006年
38	浜松モスク	静岡県浜松市南区		2006年
39	坂城モスク	長野県埴科郡坂城町	ビラールモスクナガノ	2006年
40	館林サラマットモスク	群馬県館林市		2006年
41	マディーナ・モスク	茨城県小美玉市		2006年
42	水戸アブーバカルモスク	茨城県水戸市		2006年
43	大阪茨木モスク	大阪府茨木市	大阪茨木モスク	2007年
44	仙台モスク	宮城県仙台市青葉区	ICCS	2007年
45	ベイトルムカッラムモスク	茨城県ひたちなか市		2007年
46	札幌モスク	北海道札幌市北区	北海道イスラミックソサエティ	2007年

47	春日井モスク	愛知県春日井市	春日井イスラミックセンター	2007年
48	結城モスク	茨城県結城市		2008年
49	徳島モスク	徳島県徳島市徳島	徳島マスジド徳島イスラーム文化センター	2008年
50	バーブ・アル=イスラーム岐阜モスク	名古屋モスク	岐阜県岐阜市	2008年
51	小樽モスク	北海道小樽市	マスジド・アル・ヌール小樽	2008年
52	岡山モスク	岡山県岡山市北区	Okayama Islamic Center	2008年
53	坂戸モスク	埼玉県坂戸市		2008年
54	別府モスク	大分県別府市		2008年
55	石岡・小美玉モスク	茨城県小美玉市		2008年
56	鹿沼モスク	栃木県鹿沼市		2008年
57	一宮モスク	愛知県一宮市		2008年
58	福岡モスク	福岡県福岡市東区箱崎3丁目2番18号	FIC 福岡マスジドアンヌールイスラミックセンター	2009年
59	三重モスク	三重県津市	三重イスラム文化センター	2009年
60	いわいモスク	茨城県坂東市		2009年
61	日立モスク	茨城県日立市		2009年
62	アンヌールモスク新潟	新潟県新潟市西区		2009年
63	千葉(四街道)モスク	千葉県千葉市		2009年
64	川越モスク	埼玉県川越市		2010年
65	御徒町モスク	東京都台東区	AS-SALAAM FOUNDATION	2010年
66	瀬戸モスク	愛知県瀬戸市		2010年

67	福井モスク	福井県福井市		2010年
68	埼玉モスク	埼玉県さいたま市	さいたま・モスリム・カルチャル・アソシエーション	2011年
69	飛島モスク	愛知県海部郡飛島村		2011年
70	木更津モスク	千葉県木更津市		2011年
71	東広島モスク	広島県東広島市		2012年
72	豊橋モスク	愛知県豊橋市		2012年
73	熊本モスク	熊本県熊本市中央区	熊本ムスリム協会	2013年
74	桐生モスク	群馬県桐生市		2013年
75	島根モスク	島根県松江市		2013年
76	蒲田モスク	東京都大田区	カマタ・マスジド	2013年
77	金沢モスク	石川県金沢市		2014年
78	鳥取モスク	鳥取県鳥取市		2014年
79	富山五福モスク	富山県富山市		2014年
80	鹿児島モスク	鹿児島県鹿児島市	鹿児島イスラム文化センター	2014年
81	沖縄モスク	沖縄県那覇市		不詳

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ）』

第九章

イスラームの葬儀

1－イスラーム社会の遺体処理は土葬

イスラーム社会における遺体処理は、例外なく火葬ではなく土葬である。イスラーム出は「生」と「死」は創造主アッラー（神）の計らいによってなされていると信じられている。クルアーンによれば、埋葬に関しては「やがて、彼（人）を死なせて墓場に埋め、それからお望みの時に彼（人）を蘇らせる。」と書かれている。この「墓場に埋め」の記述が、遺体処理は火葬ではなく土葬でなければならない根拠になっている。また、火葬はその火が地獄の業火と結びつけられて考えられ、懲罰による責めの苦が連想されことも火葬が禁じられている理由の１つでもある。

2－死亡後に施される遺体の清め「洗体」

ムスリムに死期が近づいた（危篤）の時には、そこが病院であっても自分のベッドであっても、身体全体を聖地マッカ（メッカ）の方向に向けるようにしなければならない。もし、それができない時は、その人の顔を起こして顔だけでもマッカの方向に向けるようにする。それは世界中のムスリムにとって、マッカの（アッラーの家と呼ばれる）カアバ神殿が、礼拝に立った時にはまず顔を向ける方角（キブラと呼ばれる）だからである。病院などの医療機関で、医師から死が告げられると（臨終）、故人にいちばん近い遺族（夫や妻など）は、いくつかの遺体処理を行う。主なものとして、以下の遺体処理があげられる。遺体の目をとじる。口が開いた状態にならないよう下顎を閉じた後、白布を細く切った紐で顎の下を通し、頭の上で結わえた固定する。遺体の腹に何か適当な物を乗せて、ガスでお腹が膨らまないようにする。これらの処置が済むと、遺体（故人）はいったん自宅へもどすか、マスジドに直接搬送され、そこで遺体の清め「洗体」

が行われる。この洗体と呼ばれる遺体処理は、イスラームを特徴づけるもののひとつである。この洗体を行う場合のルールとして、規則と順序がある。まず規則として、男性の遺体は男性が、女性の遺体は女性が洗うのが基本である。故人の配偶者が希望した場合は故人の妻や夫が洗体してよいと認められている。洗体する序列だが、故人と血縁の近い遺族が優先する。洗体をする場所は、水を使え身体を横たえて洗えるだけのスペースがあり、人目が避けられる場所であればよいとされている。自宅の場合は、浴室なので処置されるが、東京ではマスジドにあるウドウー（日常の礼拝前の清め）を行う場所に、洗体専用の台を用意して処置する。また「洗体室」を備えたマスジドもある。洗体を始める前に、男性は陰部を露わにしないようにその部分に、女性の場合は身体全部に白布が掛けられる。また遺体についているものは絆創膏に至るまで、すべて取り除かれる。その際、白布で覆われた部分については、洗体の時と同様に手探りでおこなわれることになる。もし、遺体を洗う前に、未消化の食べ物などお腹の中にあるものを出す必要があるときは、軽く腹部を圧迫して体外に排出させたり、身体の汚れがひどい時は石鹸などを用いて汚れを取り除くことになる。洗体のやり方は、新しいタオルに取り替えて、まずウドウーと同じように手、口、鼻、顔、腕、頭、耳、足の順に洗う。次にあらためて頭から足先まで体の右側半分を起こして３回、同様に反対側の左側半分を起こして３回洗うのである。

３－遺体を白衣で包んで葬儀礼拝に備える

洗体を終えると、次に行う処置は遺体を白布で包むことである。全身の水滴を乾いたタオルで拭き、男性の遺体は棺の中などにあらかじめ用意さ

れた３枚の布に、女性の場合は５枚の布で包むのである。まず長さ２ｍ・幅１．２ｍ程度の大きさの白布が３枚用意される。一番下に遺体全体を包む布（１枚目）を、その上に２枚目として下は半分を包む２つ折りの布が敷かれる。さらに、その上に上半身を包む布を２つ折りにして敷き、その布に頭を通す切れ目を入れる。女性の遺体の場合は、さらに頭を覆う布（４枚目）と、胸の上にかける布（５枚目）が加えられる。このように敷かれた布の上に遺体は横たえられ、上の布から順番に包んでいく。最後に一番下の大きな布で遺体全体が包まれたことを確認し、頭と足先と胴の部分を紐で軽く結わえて完成する。その後、遺体は棺の中に納められ、葬儀礼拝（サラート・ル・ジャナーザ）の行われる場所に運ばれる。もし、そこにマスジドがなければ、礼拝が行われる。なければ敷地内の広場で等が使われる。国によっては棺を使わずに、布で包まれた遺体のまま低い寝台のような台の上に載せ、礼拝の場へ運ぶところもある。

４－質素な祭壇が特徴的・日本的な要素も折哀

葬儀の手順や進行は、当協会の場合、会員のほとんどが日本人であることから、一般的な日本式に準じている。司会者による開会の辞、主催者（世話人）の挨拶と故人の紹介、弔辞と弔電の披露、会葬者の献花（焼香の代わりに、親族や遺族関係者の順で切り花を献花する）。（詰める）その後、導師（イマーム）の指導による「葬儀の礼拝」を行う。礼拝が終了し，導師が退場した後、喪主が挨拶し、最後に司会者の閉会の辞によって終了する。日本では出棺の前に、お別れの儀として、柩の蓋を開けて遺品を入れたり、蓋に付いている小窓を開けて遺族や友人らが個人との最後のお別れをしたりするが、イスラームでは通常、洗体後の白衣で覆った顔や体を遺

族や友人に見せることはしない。しかし、これも遺族の希望があれば、顔だけ限定的に開けて最後のお別れとして対応することもある。

5－祭壇と遺影

日本の一般的な葬儀において、故人に対する思慕と敬意の表れか、祭壇の豪華さが目立つが、イスラームの場合は質素な祭壇であり、これが大きな特徴と言えるだろう。しかし日本ムスリム協会の場合は生まれながらのムスリムではなく、人生の途中で入信する人がほとんどあるため、入信前の知己が多い故人も少なくない。したがって、遺族によってはそれなりの祭壇を希望する場合もあり、その時は日本式の形態に準じている。その場合でも、特徴的なのは故人の遺影を飾らないということである。これにも例外があり、遺族の希望があれば、葬儀の礼拝前までの間、祭壇の一隅に遺影を飾ったりする。とはいえ、遺影写真を小さめにしたり、祭壇のフラワースタンドや供花・籠花も過度にならないよう配慮するのはいうまでもない。仏式葬儀のような僧侶の読経もなく、静かにクルアーンの読経を会場に流すのが一般的である。

6－葬儀の礼拝

マッカの方向（日本は西の方向）に向けて置かれた柩を前に、礼拝を指導する導師が立ち、その後ろにムスリムが横一列に並ぶ。ムスリムが多ければ２，３列になる。この礼拝はムスリムだけが参加し、非ムスリムは参加しない。導師がクルアーンで黙読した後で唱えるアラビア語の言葉「アッラーフ・アクバル」（神は偉大なり）に続いて、ムスリムも一同も唱和する。この言葉を数回唱和して葬儀の礼拝は終わるが、この間、参列したムスリ

ム以外の親族、友人、知人は同じ会場でムスリムの後方に並び、故人の冥福を祈る。日本では、ムスリムとの生前の付き合いがごく限られていた故人の場合には、遺体を直接、イスラーム霊園に運んで、そこで洗体して棺に納めた後、屋外で葬儀の礼拝を行うとともに埋葬することもある。イスラームは本来、職業的な聖職者はいないことになっており、ムスリムの中で葬儀の儀式（特にアラビア語の文言と礼拝の作法）を知っていれば、誰でも導師の役割を果たすことができるのである。このように、イスラームではあまり形式にとらわれず、故人が来世で天国に入れるようムスリムは協力し合う。特に個人だけがムスリムで、故人の親、兄弟がムスリムでない場合は、遺体が火葬されないように注意し、非ムスリムとの話し合いをしながら葬儀の手順を決めなければならない。

7－故人を偲ぶ通夜

日本では、葬儀、告別式の前に通夜の習慣があるがイスラームではない。臨終が近づくとムスリムの遺族は日本ムスリム協会と連絡を取り、葬儀の前後策を事前に相談することになるが、臨終後に、遺族が特に親交のあった友人、知人に故人の近況などを報告したい場合は、その時間を葬儀の礼拝前に弔問を受ける場合もある。場所は自宅やマスジドの一室であったりする。イスラームの通夜は「故人を偲ぶ会」と言う意味合いが強く、宗教的行事の要素は少ない。遺体を自宅へ移し、親族と一夜を明かすなど、非ムスリムと同様の日本的な通夜とする場合もある。

8－出棺、一般の葬儀にみられないイスラームの葬送習慣

葬儀の礼拝が終わると、柩はムスリムたちの手によって搬送車まで移さ

れる。いわゆる出棺である。親族でも非ムスリムの場合はこれに加わることなく、ムスリムたちの手に委ねることになる。

ムスリムたちは【アッラーフ・アクバル、ラーイラーハイッラッラー】（神は偉大なり、アッラーの他に神はなし）を唱えながら、故人との別れを惜しみつつ冥福を祈るのである。搬送手段は業者に委託するのが一般的であるが、なかにはムスリムの友人や知人の車で運んでしまうこともある。

9－ムスリム用の墓地は日本国内に5か所

ムスリムが死者に対してなすべき重要なことは、遺体を埋葬（土葬）することである。その理由はクルアーンの中に明確に記されている。「我（アッラー）は生存者と死者双方のために、大地を大きな容器としなかったか－－－」すなわちアッラーは彼（人間）のために、生きているときは大地を人間の住まいとし、死後は大地の中に彼を眠らせるために、この大地を創造したということである。したがって、死者を埋葬することは後に残った者の義務である。今日の日本では、遺体はほとんどが火葬され、土葬そのものの習慣がなくなりつつある。かつての主流だった土葬は、法律的に許されていても、それを認めるかどうかは地方自治体の判断に委ねられている。こうしたなか、日本国内でイスラーム霊園として埋葬が正式に認められている墓地は、確認できるもので5か所と少ない。以前は、東京都の多磨霊園の一部と山梨県塩山市（現甲州市）の日本ムスリム協会所有の墓地があるだけであった。しかし最近では当協会の墓地のそばや北海道余市町、静岡市清水区に、寺院墓地の一部をムスリムの埋葬用に転用するケースがみられるようになった。仏教寺院の理解により、習慣の異なるイスラームの葬儀礼拝（墓地でも営む）や埋葬ができるのは、特に地方に住むムスリ

ムにとって朗報であり、有難いことである。

１０－遺体の搬送、埋葬もムスリムの手で行われる

葬儀の礼拝が終わった後の遺体（柩）の埋葬手順は以下の通りである。まず遺体はムスリムによって搬送車まで運ばれ、墓地へ直行する。墓地までの搬送は、葬儀社や霊柩運送業者に依頼することが多いが、肝心なことは、墓地についてからの埋葬作業もムスリムの手で行われるので、それに必要な人数が同伴しなければならないことである。通常は遺族がマイクロバスを用意して、埋葬作業をお願いするムスリムに同伴してもらうことになる。

１１－山梨・塩山（甲州市）の霊園

日本ムスリム協会が管理、運営する山梨・塩山のイスラーム霊園は新宿から中央自動車道で約１時間３０分、勝沼ＩＣで下り、県道３８号を北へ約１５分、ＪＲ中央本線塩山駅の東側の山肌に位置する。開園時期の違いで、旧霊園（１９８７年開園）と新霊園（２０００年開園）の２か所に分かれており旧霊園は広さ１，６３８㎡で、大人・子供を含めて約１００体を埋葬、新霊園は３，２２５㎡の規模があり、大人２００基ぶんが用意されている。永代使用料は年会費を納める正会員の使用を優先するため、会員年数に応じて金額（５０万円～９０万円）も違う。

１２－区画の決定

当協会のイスラーム霊園の場合は、一般に行われているように墓地を造成し事前に販売することはしないので、基本的に区画（１区画＝約２㎡）

の位置は亡くなった人の順で決まっていく。一方で、家族で同じ場所に埋葬されたいと言う希望も強く、これに対していかに対応していくかが今後の検討課題にもなっていく。

１３－墓穴堀り

埋葬は葬儀が午前中行われることが多いので、午後になる。埋葬のための墓穴堀りは地元の業者に委託しているので、遅くとも前日までに連絡し、埋葬当日の午前中に掘ってもらっている。墓石の形状はイスラーム諸国でも様々で、この形にしなくてはならないという規定はない。当協会の場合は横１ｍ、横２ｍ、深さ２ｍを目途に墓穴を掘る。深さが２ｍもあるので、業者は小型の油圧ショベル機使って掘っていく。この時一番心配なのは天候で、雨の場合は全体的に作業が難しくなるからである。

１４－遺体移動

墓地に着いた遺体は、できるだけ多くのムスリムのよって運ばれるのが良いとされ、死者の冥福を祈る声とともに墓穴まで運ばれる。埋葬の手順は、まず遺体を柩から外に出すことからはじまる。

遺体を下で受けるため墓穴に２人が入り、前後に立って頭と足の部分を受ける態勢をとる。地上にいる者は布を３本の帯状にして、頭、胴、胸、足の部分の下に通し、両脇を６人の人が持って静かに下していく。この作業は地上の６人と墓穴の２人が連携がとれてはじめてできる作業である。墓穴に下した遺体は土の中に直接横たえられ、顔をマッカの方向に向ける。その上から蓋をするように空になった棺を被せ、次の土盛り工程へ進む。

１５－土盛り

墓穴を土で埋める作業である。故人の近親者、遺族関係者、友人、知人、葬儀参加者の順序で掘り起こした土をかけていく。全員が終わった段階で墓穴堀の委託業者が油圧ショベル機を使い、残った土を満遍なく墓穴に運んで土盛りの状態にする。持参した生花を土盛りの上に供えるとともに、同伴した者全員が墓の周囲に立ちイマームがクルアーンを読誦するなかで死者の冥福を祈る。

１６－区画の整備

埋葬後、数か月経つと墓は、かけて土が落ち着いて土盛りの状態ではなくなるので、ある程度平らになる。協会が区画を整えるのはこれ以降のことで、周囲をブロックで囲み、他の墓と識別できるようにする。遺族によっては墓を大理石で囲み、土の表面に玉石を敷いたりして美観を整えるが、この費用は遺族が負担する。

１７－墓石

墓石の設置も遺族の自由だが、協会としてはイスラームが説く華美を避ける意味で、標準となるべき石の大きさや石に刻む文字・言葉の見本も決めており、遺族から要望があれば原稿の作成にも協力している。こうした習慣はイスラーム各国によって大きく異なり、遺族が在日外国人の場合は彼ら独自の石がおかれたりする。

１８－イスラーム葬儀に特化した専門業者の存在

実際の遺体の搬送では、当協会が関わることは滅多にないが、請負業者

の問い合わせを受けることがある。そうした時に紹介するのが「東典社」である。東典社は、当協会の会員が死亡した時に依頼している東京・南青山の葬儀社で２０年来の付き合いがある。

出典；２０１２年２月号 FUNERAL BUSINESS（資料提供；日本ムスリム協会会報より）

第十章

巻頭言（日本ムスリム協会会報より）

１－巻頭言「世界的異常な気候変動」

私たちはアッラーから様々な恩恵をいただいている。美しい自然もその一つで自然の恵みなくしては生活できない。それゆえ自然の摂理に反する行動は慎まなければならない。

ところで近年の気候変動は世界的に異常である。日本でも豪雨で多数の犠牲者や大きな被害を受けている。その原因として、私たちがより便利で快適な生活を求めて自然の大切さより経済性を重視した方法で製品を生産した結果、二酸化炭素を多量に発生させたからだとも言われている。この危機を乗り越えるため昨年９月国連で気候行動サミットが開催された。来年からスタートする２０１５年に１８５カ国により採択されたパリ協定によれば、産業革命以後の気温上昇を１．５度未満に抑えることを目標としている。しかし気温はすでに１度ほど上がっており２０３０年代には１．５度に達し、今世紀末には３度を超すと言われている。このままでは気候変動は益々激しさを増し、豪雨による甚大な被害、森林の大火災発生、北極や南極の氷が解けて低地や国が水没したりすることになるかもしれない。国連のサミットではスエーデンの１６歳の環境活動家・グレタさんが「若者はあなたたちの裏切りに気づき始めている。もし私たちを見捨てる道を選ぶなら、絶対に許さない」と訴えた。またサミット直前には１６０カ国以上で４００万人を超す若者たちが気候危機を訴えるデモを実施した。こうした世代を担う若者たちの悲痛な叫びや怒りを世界の指導者は無視してはならない。また７５億人の世界の人々も二酸化炭素を生まない製品を使用して協力しなければならない。サミットでは７７カ国が取り組みの強化を表明し「２０５０年には二酸化炭素など温室効果ガス排出ゼロにすること」を誓ったが、中米やインドなど主要排出国の反応は鈍い。脱炭素社会

への道のりは厳しいが、あらゆる手段を用いてこの自然環境保護のため全力で取り組まなくてはならない。

クルアーン：

((アッラーこそは、天と地を創造され、天から雨を降らせ、あなたがたのためにお恵みになられる方である))（１４章３２節)。

(２０２０年２月号)

２－巻頭言「新型コロナウイルスの試練に思う」

今回の新型コロナウイルス感染拡大は人類にとってかつてない程の厳しい試練である。一月下旬、中国武漢から始まった人から人へと感染する新型コロナウイルスは、瞬く間に国境を越えて世界中に広がり、３月末現在で１８０カ国、感染者は１００万人、死亡者は５万人に達するという。国内でも感染者は鼠算式に増大し（４月３日現在、３，８５０人)、医療崩壊を招く勢いだ。私たちは死をもたらす目に見えないこのウイルスに大きな不安と恐怖を抱く日々を送っている。原因はこのウイルスに対するワクチンや治療薬がなく、確たる予防対策が取れないからである。こうした人類にとって大変危険なウイルスによる病気は今後もいつ発生するかわからない。そのためにも今回の感染対処方法について、よくよく検討・反省し、同時に発生した原因を究明する必要があるだろう。

発生当初から多くの医師や専門家が感染拡大の予防や対処法として、換気の悪い密閉空間、多くの人の密集する場所、近距離間での会話等を避けるように警告している。また早く感染検査をするように訴えてきた。ところが一部の事業者は収入減少で生活が苦しくなる、あるいは若者は致死率が低いとの情報に、この警告を軽視してきたように思える。また、政府は感染した国からの入国規制や集会・イベント等自粛要請をしてきたが、その

対応は遅れてしまったような気がする。こうした緊急事態の場合は、政治的、法律的、経済的な配慮も大切だが、国民の健康や命を守ることを最優先し、早急に決断を下すことが求められる。当然なことだが国民の健康こそが、健全な社会を作り、健全な国家をつくる礎なのだ。国民は一人一人が危機意識を持ち、自分のため、社会のため、専門家や政府の訴えを重く受け止め、遵守する必要があろう。早く治療薬が作られ、この問題が終息し、安心して生活できる社会に戻るように祈っている。最後に、このウイルスで亡くなられた方に哀悼の意を申し上げ、また感染者を救うために日夜献身的に尽くしている医療従事者の方に感謝を申し上げる。

クルアーン；

((人の生命を救った者は、全人類の生命を救ったのと同じである))（５章３２節)。

(２０２０年４月号)

３－巻頭言「核兵器の廃止に向けて」

神は私たちにクルアーンの中で学問を奨励しています。そして、学問の一つである科学の力で作り出したのが原子力です。その原子力からの核兵器・原子爆弾の恐ろしさについては誰でも知っていることです。広島・長崎に投下された原爆によって多数の命が一瞬にして奪われました。またそのような核兵器が使用されることがあれば同じような悲劇を生むでしょう。命は神から与えられたもので、私たちは人生を全うするまで命を大切に守る義務があります。

科学者たちはエネルギー源とする平和利用のためにこの原子力を作ったと主張しています。しかし人々は戦争に勝つための武器としても使おうとしています。昨年来日されたローマ教皇は広島・長崎でのメッセージの中で

「原子力の戦争目的の使用は、倫理に反する、核兵器は保有することも倫理に反する。これについて私たちは神の裁きを受けることになる」と厳しく警告しています。人々はこのメッセージに命の大切さを再認識させられたはずです。多量殺害をもたらす核兵器は保有することも使用することも許されず、廃棄すべきです。

現実には、それは難しいことです。保有国が「自衛のための保有」を主張しているからです。この危機を乗り越えるためには、すべての保有国が核兵器を使用しないことを約束するしかありません。理想に向けてですが、すべての保有国を含めた世界諸国が核兵器を廃棄処分することを約束し、その証として核兵器禁止条約に批准することです。そしてその監視機関を設立し、厳しく監視するのです。

核兵器禁止条約を推進するためには、政治家と連携し進めていくことが重要です。被爆国の日本がその先頭に立って推進することも大切です。

私たちの協会がメンバーになっている世界宗教者平和会議日本委員会は核軍縮・不拡散議員連盟日本（ＰＮＮＤ日本）と国連本部に提出する核兵器廃止に向けた共同提言文を作成しました。この提言文が核兵器廃止への本当の第一歩になることを祈っています。

クルアーン；

((人を殺した者は、地上で悪を働いたと理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである))（５章３２節)。

（２０２０年９月号）

４－巻頭言「命の大切さ」

今回のコロナ感染は世界中の人々に大きな犠牲と不安をもたらしました。早く終息して平穏な生活が戻ってくることを祈っています。

１００年に一度の国難と言われるこのウイルス感染問題に直面し、私たちは大きな衝撃と恐怖心を抱き、多大な犠牲・被害を受けました。しかしながら一方、コロナウイルスによって、私たちは様々なことに気付かされ、また教訓を得ました。

その最たるものは命の大切さです。クルアーンでは「人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。人の生命を救う者は全人類を救ったのと同じである」と一人の命の大切さを教えています。またクルアーンでは「誰でも死を味わう」と述べていて誰も死から逃れることはできません。命は神から与えられたもので、私たちは人生を全うするまで命を大切に守る義務があります。

また私たちは人生を幸せに過ごすために神から様々な恩恵をいただきました。食欲・物欲や他の動物にない言葉と知恵などです。それらは人生を幸福に楽しく過ごすために神から与えられた恩恵を大いに活用しなくてはなりません。しかしながら、正しく生きるためにも、社会の秩序を維持するためにも神から与えられたルールを守らなければなりません。そのルールは神の言葉であるクルアーンに記されています。

神は私たちにクルアーンの中で学問を奨励しています。そして学問の一つである科学の力で作り出したのが原子爆弾です。核兵器の恐ろしさについては誰でも知っていることです。広島・長崎に落とされた原爆によって多数の命が一瞬にして奪われました。またそのような核兵器が使用されることがあれば同じような悲劇を生むでしょう。

科学者たちはエネルギー源とする平和利用のためにこの原子力を作ったと主張しています。しかし人々は戦争に勝つための武器としても使おうとしています。昨年来日されたローマ教皇は広島・長崎でのメッセージの中で

「原子力の戦争目的の使用は、倫理に反する、核兵器を保有することも倫理に反する。これについて私たちは神の裁きを受けることになる」と厳しく警告しています。人々はこのメッセージに命の大切さを再認識させられたはずです。多量殺害をもたらす核兵器を保有すことも使用することも許されず、廃棄すべきです。

宗教者は多くの人々に核兵器の廃棄を伝え、人々の良心を喚起することが大切です。特に国益や国威発揚のため核兵器を保有し他国に脅威を与えるようとしている政治家たちに対しては強く訴える必要があります。私たちは神から与えられた英知によって、対話を通してこの問題を解決するように努力すべきです。

ではどのようにして核兵器保有国に対して、この危険な兵器を廃棄処分するように勧めるべきでしょうか？現実には、それは難しいことです。保有国が自衛のための保有を主張しているからです。この危機を乗り越えるためには、すべての保有国が核兵器を使用しないことを約束することです。理想的なことですが、すべての保有国を含めた世界諸国が核兵器を廃棄処分することを約束し、その証として核兵器禁止条約に批准することです。そしてその監視機関を設立し、厳しく監視するのです。

核兵器禁止条約を推進するためには、政治家と連携し進めていくことが重要です。被爆国の日本がその先頭に立って推進することも重要です。米国の核に守られている日本ですが、米国国民も核兵器に対する思いは日本国民と同じだと思います。日本政府は自ら核兵器禁止条約に批准し、米国政府に対して、条約に向けて強い働きかけをする努力してほしいと思います。最大多数の核保有国の米国が指導的立場に立ち、まず世界の核兵器削減を実施し、核兵器廃棄に向かっていくことが肝心です。

一方、市民の精神的指導者である宗教者の役割も重要です。このような核兵器廃絶に向けた提言を、マスメディア等を通して広く国際社会に呼びかけ、人々の強い関心と共感を得ることが大切です。

（２０２０年９月号）

５－巻頭言

２０２１年を迎えて明けましておめでとうございます。

昨年は本当に世界中の人が新型コロナウイルスに悩まされ苦しい年だった。早く終息して安心して生活できる日が一日も早く訪れることを祈っている。

終息するにはどうすべきか、毎日報道された新聞、テレビで、各分野の専門家が述べた意見を参考にして、個人的な見解を述べてみたいと思う。

感染対策として、最良案は感染原因を分析し、コロナを根絶することです。政府は国民に毎日のように３密遵守を呼び掛けました。多くの市民はこれを守るために努力しました。しかしながら国民全員にこれを求めることは無理なことです。社会生活、仕事の上で他人との交流は避けられません。またコロナは一部の人の予防を守らない人々によって他人に影響を与える。まるで袋に入っていた水の一滴が袋から出た場合、袋の外のすべてを濡らしてしまうようなものです。それゆえコロナには隔離対策が必要。全国民に対して無料でＰＣＲ検査を行い無症感染者も含めて隔離する必要がある。それを実施し成功した国々があるので参考にすればよいと思う。

一方、政府は経済と感染対策と両輪で進めていくことを政策として、Ｇｏ ｔｏ ｔｒａｖｅｌやＧｏ ｔｏ ｅａｔを掲げ、感染拡大を広めることを実施にした。また見舞金として全国国民に給付金を配布した。確かにこのことにより助かった人たちもいる。

しかしながら、肝心なことは命の危険を無くすことであり徹底した防止政策によりコロナを克服して安心した社会に戻すことである。その後、経済活動を支援した方がはるかに経済復興は早く利益も大きい。
政府が日本は他の先進国に比べてコロナ感染死亡者がはるかに少ない。したがって特に政策を変える必要がないと発言したことに驚いた。命を軽視していると思われても仕方ない。国民の命を守ることが政府の最大の任務であり、国民の代表として選ばれ人々である。また法改正を要求されていて、一日遅れればそれだけ犠牲者が増えるにも関わらず年末から１月１７日まで国会を中止したのも驚いた。正月も休まずにコノナ患者治療のために働く人たちに申し訳ないと思わないのか。今回のコロナ感染問題かつて経験をしてなかったこととは言え、政府の対応は遅く国民は激怒したと思う。指導者の責任は重い。反省し、賢明な対策を敏速に実行しては惜しい。まさに今は長い暗闇のトンネルの中にいる。政府指導者には、市民がこの暗闇を通り抜けて、明るい未来に向かって邁進できるようにしていただきたい。もちろん国民各自の忍耐も求められる。
（２０２０年１２月号）
６－巻頭言「新型コロナウイスル感染の試練に思う（２）」
国民の多くは、新型コロナウイルスに対する緊急事態宣言で政府の外出自粛要請を尊重し、自宅で過ごしたことと思う。これが最善な方法だと専門家から助言を受け政府が国民に要請を発令した結果、感染第一波の犠牲者増大を防ぐことができたと思う。しかし、収束するまで感染の波が何回か起きると言われているので、今後も油断はできない。１００年に一度の国難と言われるこのウイルス感染問題に直面し、私たちは大きな衝撃と恐怖心を抱き、大きな犠牲・被害を受けた。（６月末現在世界の感染者；

１００万人、死者;２０万人)。しかしながら一方、コロナウイルスによって、私たちは様々なことに気付かされ、また教訓を得た。外出制限により、命の大切さ、自由の大切さ、人との交流の大切さ、家族の大切さ、団結の大切さ、忍耐の大切さ等など。また、新しい勤務体制、新しい生活様式、幸福のあり方等など。そして私たちムスリムにとって一番大切なことは、この世のすべてを制御されている創造主の偉大さを再認識したことであろう。５月１４日、アブダビの人類愛団体が世界中の宗教団体に呼びかけ、宗教・国境を越えて神に新型コロナウイルスの収束を祈った。世界の信者が一緒になって神に懇願すれば寛容な神は願いを受け入れてくれるはずとの思いであった。ローマ教皇もアズハル総長もこの祈りに参加した。今回のコロナ感染のみならず、最近多発する人為を超えた地震、津波、火事、洪水などの自然災害は、神から人類に与えられた警告であり、試練だと思わざるを得ない。今日の世界は神の意志に反した格差社会であり、消費社会であり、環境軽視社会であり、経済優先社会であり、利己主義はびこる社会である。

これではいつまでたっても世界に平和は訪れないだろう。平穏で幸せな生活は期待できないだろう。アッラーから与えられた英知でもって人類は反省し、協力し団結して世界的諸問題を解決する行動を起こす時期を迎えているのだと思う。

クルアーン；

((だがこれ（クルアーン）は、われが下した祝福された啓典である。だからこれに従って、義務を尽くしなさい。恐らくあなたは、慈悲に浴するだろう))（６章１５５節)。

(２０２０年６月号)

徳増公明の主な履歴

１９４３年４月１０日静岡県浜松市に生まれる。

１９６２年；拓殖大学入学。

１９６５年；エジプト政府の官費留学生としてカイロに到着。

１９７１年；東京のトルコ・モスクで増田輝子と結婚。

１９７６年；エジプト・アズハル大学法学部を卒業して帰国。

１９７６年；アラビア石油株式会社に就職。

１９８２年～１９９２年アラビア石油リヤード事務所に勤務。

１９８５年；大巡礼（ハッジ）を行う。

２００２年；拓殖大学イスラーム研究センター（２００７年イスラーム研究所に改名）の研究員。

２００３年；日本ムスリム協会１０代会長に就任。

２０１７年；世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）の核廃絶タスクフォースの一員、２０２０年理事職に就任。

２０１８年；アラビア石油を退職。

２０１８年；イスラーム研究所客員教授、その後名誉教授。

２０２１年；日本ムスリム協会会長職を退任し理事職。

２０２３年；自伝「だるまへの願い」を出版。

著書；自伝「だるまへの願い」を引用、一部省略。